

幼稚園等における教育相談の実際から  
— 学生に伝えるべき学びの考察 —

佐々木 利子<sup>1</sup> 有馬 則子<sup>2</sup>

**From the Practice of Educational Consultations at the Kindergartens**

— What kind of things should the instructor tell students? —

Toshiko Sasaki<sup>1</sup> Arima Noriko<sup>2</sup>

要約

この研究ノートの目的は、教育相談に臨む際に留意すべきポイントを整理し、授業において伝える内容を明らかにすることである。教育相談の実際では、相談技法及び事例からの学びを活用しており、授業においても、事例の留意すべきポイントを整理しておくことで、対応の実際が理解しやすくなるため、相談技法及び具体的対応を中心として授業設計を行っている。

研究ノートでは、第 1 に、相手の状況に応じ様々なアプローチ方法が可能となる相談技法について基本として押さえた。次に、留意すべきポイントを、幼稚園等においてよくみられる相談事例をもとにまとめた。まとめを通して、いずれの場合にも共通すると感じられたのは、相談者の思いに寄り添う意識を持つこと、そして、相談内容によっては一人で抱え込むことなく、教職員間で連携していくことである。

キーワード：教育相談、相談の技法、事例

(Abstract)

The purpose of this article is 1) to summarize the points which the teacher should keep in mind when he/she replies to the educational consultations, and 2) to make clear what should be taught to students in the course of Educational Consultation. In the practice of the educational consultation at the kindergartens, the teachers use the consultation techniques and knowledge which be learned from the cases. Therefore, in the course, I summarized the points which should have been kept in mind so that it made easy to understand the actual responses for students. I planned the course centering on the consultation techniques and the actual responses. In this research note, first, I summarize the consultation techniques which enable to adopt the various response depending on the clients' situation. Next, I summarize the points, which should be kept in mind, from the actual consultation cases which often seen in kindergartens. And I find that 1) keeping in mind to sympathize with clients, and 2) cooperating with other stuffs depends on the contests or progress are common to all cases.

Keywrds : educational consultations, consultation techniques, actual consultation cases

受理年月日：2018年1月4日

<sup>1</sup>高松短期大学保育学科講師 <sup>2</sup>高松市教育委員会指導主事

## 1 教育相談の捉えと授業における取り組み

教育現場では常に様々な課題があり、それらに対する相談・話し合い等が行われている。その実際を見ると、例えば、医療現場でのカウンセリングでは、思いを受け止め自分に向き合えるよう支えていくことで、自分で解決の糸口を見出していくことが多い。それに対し、教育相談では、母親が自分の子育てを振り返れるよう関わることで、カウンセリングと同様に自分なりに解決を見出していく場合もあるが、「子どもを見る立場」として同じステージに立ち、共にどう関わるかを一緒に考えていくことも多々ある。

筆者が幼児教育の現場で実施してきた教育相談を考えると、時間を設けて相談室でじっくりと話し合うものもあれば、登・降園時に保護者と子どものちょっとした姿を話し合うこと等、日常的な活動の中に多くの教育相談的な場面が含まれているものもあった。そしてそれらは、職員間で相談しながら子どもに関わったり、保護者への関わりを職員間で情報共有し、相談しながら進めていったりと、常に職員集団としてのつながりを意識するものであった。

筆者の一人は、現在短期大学において保育者養成に関わっており、担当している「教育相談」の授業において事例をもとに学生に教育相談の実際を伝えている。この時、同じような事例であっても、個々の状況の違いにより対応は多少なりとも変わってくることから、各事例についてある程度対応のポイントを洗い出しておくことで、相談内容に応じた対応の実際を学生により訴えやすくなるのではないかと考えた。そこで、この研究ノートにおいて、各事例における学生に伝えるときのポイントをまとめた。

また、教育相談については、子どもに関わること、職員間での相談、保護者との面談と、大きく分けて3つに分類されると考える。しかし、幼児期は子どもとの直接的な相談というよりは、職員間での相談をもとに保育者が自身の関わりを振り返り、より望ましい関わり方を考えていくため、この研究ノートでは、保護者との相談と、子どもへの関わりも含めた職員間の相談の2つに絞って考えていきたい。

また、相談の技法についても具体的に知ることで、相手の状況に応じ様々なアプローチ方法が可能となることから、これらについても基本として押さえておく。

## 2 教育相談のための技法と授業における学生の状況

様々な教育相談に関する文献等に共通して出てくるのが、次のような技法である。

[カウンセリングマインド]

相手の話を傾聴しながらその思いに寄り添い、共感しようとする。これは、相談活動に限らず、保育者の基本姿勢としても言われるものである。

日頃の保護者や子どもとの関わりもこれをベースとすることで、信頼関係が築きやすくなる。授業の中で実際に体験することで、学生同士でも話す側の心持ちが違ってくることを

実感し、その重要性に気付く様子が見られているところである。

〔ポジティブメッセージ〕

何かを伝えようとするときに、肯定的な意味を持つ言葉で伝えていくこと。自分のしていること、考えていることを肯定的に受け止められることが、前に進もうとする背中を押してくれることになる。授業で改めて考えようすると難しい様子が見られるが、実習中など子どもたちに関わるなかでは、学生もごく自然にしている。

〔リフレーミング〕

物事を見る視点を変えることで、同じ状況でも違った捉え方をしていくこと。同じ状況でも、捉え方・意味付けによって印象は変わる。授業での体験により、捉え方は一つではないことに気付くことで自分の意識が変わり、行動につながることは理解できている。その一方で、気持ちがマイナスの捉えに引きずられていると、なかなか意識の切り替えができていくことも、感じているようである。

〔メタフォリカルアプローチ〕

物事の説明にたとえを活用することで状況をイメージしやすくすること。活用の頻度には保育者により個人差があるが、保育・教育現場では、ごく自然に行われている。たとえで示した論点を、本来伝えたい話に重ねることで、伝えたい要旨がより伝わりやすくなる。授業の中でも取り入れているので活用の具体的な理解はできているものの、「この場合はどのようなたとえがふさわしいか」を考えていくのは、たとえの素地となる自身の経験も少ない学生には難しいようである。

〔チューニング〕

相手のしぐさや呼吸などの間合いを合わせていくことで、相手が居心地よく話しやすい雰囲気を感じられるようにしていくこと。カウンセリングマインドと合わせて体験してみたことで、効果は実感している。これにより「相手に対しどのような位置で座ると、視線の合わせやすさがあるか」「圧迫感なく波長が合わせられるようにするためにはどうすればよいか」といったことも考える様子が見られた。

これらの技法について、一つずつ説明と演習を行ってみる中で、学生自身が気付いたこととして、相談内容により、技法は様々に組み合わせて対応するのが自然な流れであるということがあげられる。

相談の実際が未経験の段階で、具体的にどのようなアプローチが望ましいかを考えていくことは難しい。しかし、まずは相談者に対しどう向き合うか、どう言葉をかけるかを意識しながら、自分なりにふさわしいと思う方法を考えていくと、これらの技法が基本にあり、状況によって組み合わせていくのだということを基本として感じるようになる。この感覚をベースに持つことで、相談への取り組み方が見えてくるのではないかと思われる。

このことから、授業において様々な技法を学ぶことは、相談の基本を身に付けるという意味で、重要であると考えられる。

### 3 保育現場における相談事例から

筆者が直接経験したものも含め、どの園においても見られがちな教育相談の一般的事例を取り上げ、相談にあたってのポイントをまとめる。これらを参考に、教育相談の実際を授業で紹介しながら、相談時何を大事にすべきかを伝えていく。

#### 3.1 保護者との相談

保護者からの相談の内容は、子どもへの関わり、子どもの発達、母親自身の人間関係などが主となっている。保護者から申し出の場合もあれば、こちらから声をかけて話し合いを行う場合もある。保育者から声をかける場合には、保育中の子どもの様子から気になる姿が見られた時や、保護者と話して『このお母さん、しんどそうだな』と思った時、発達の課題等、保護者は気付いていないが今後について相談することが必要と思われる時等がある。また、保護者からの申し出にはクレームととれるものもあるが、わが子のことを思う気持ちが高じている場合もあり、これは教育相談の一つと捉えることができるのではないかと考える。

相談の実際としては、時間を設定し、相談室・保育室等で1時間から2時間実施する場合もあれば、降園時に、園庭や職員室の片隅で子どもの様子を見ながら話す場合もあり、保護者のタイプや相談内容によって設定を考えている。

対応については、友達とのトラブル等保育の具体的内容を伝える場合や、他の職員には知られたくない場合は、担任もしくは園長が1対1で話すようにしている。しかし、保護者が感情的になりがちだったり、非常に微妙な内容を含むため誤解しかねなかったりする場合は、複数対応により、確実に言ったこと、言われたことを証明できるようにする必要もある。この場合は、面談後、時系列で記録に起こすことも重要になってくる。

#### 3.2 保護者対応の事例

##### 3.2.1 子どもの受け止め方、関わり方がわからない場合

【事例1】 3歳児A子の母親より、園の教育日を利用して面談の申し込み(9月)

「家でA子が乱暴な行動をする。言うことも聞かなくて、どうしたらいいかと悩んでいる。この子は正常なんだろうかという思いもある」というのが相談内容であった。

これに対し、クラスでの実態を次のように伝える。「元気がよく、確かに保育者の言葉を聞かないときがあるが、A子に限らず、したいことを自制することが難しい子どもも見られている。園としては、3歳児のこの時期(9月)の発達の姿として、当たり前のもので捉えている。それと同時に、その場を逃さず言って聞かせることを続けることで、少しずつ変わってくると考えている。また、現在の具体的な姿の中に、4月からの成長と捉えていることもたくさんある。」

このように伝えることで、母親自身が「確かにそうですね」とA子の成長に気付く様子も見られた。また、話を聞いていく中で、母親自身がA子への関わり方がわからなくて悩んでいることに加え、姑や夫に母親自身の関わり方に問題があるのではないかと問われ、それが

気持ちをより重くしていることが分かった。母親の思いを受け止めつつ、「お母さんの子育てが悪いわけではないですよ。よく関わっているなど思うこと、たくさんありますよ」と伝えることで、ほっとした表情が見られた。

〔事例からのポイント〕

- ① 保護者は、気持ちに余裕がなくなると目の前の姿であっても問題部分しか見えていないことがある。問題を否定するのではなく、見方を広げ、その子の良さにも気付かせることで、全体として子どもを捉えようとするようになり、そのことが安心につながる。
- ② 時として、家族間での子育てに対する考え方の相違が、母親のしんどさの根底にあったりする。立ち入ることが難しい部分であり、相談により解決に至らなくても、母親の気持ちを受け止めていくことで多少なりとも気持ちが軽くなり、前向きに取り組もうとするようになる。
- ③ 園で行っている子どもへの関わりから家庭での関わり方のヒントがつかめるよう、具体的に伝えたりアドバイスしたりすることで、自分がどう関わればいいのかという方向性や具体的方法がつかめ、気持ちが前向きになる。

【事例2】 5歳児B子の母親へ、担任より降園時間等を利用して声をかけていく(10月)

友達との関わりや学級全体での活動の中で、自分の思いが出せなくて、泣いて黙り込んでしまうB子。眉根を寄せたつらそうな表情を見せることも多く、担任はその都度声をかけ、気持ちに寄り添うようにしながら、B子の思いを引き出していくことに努めていた。しかし、B子からの言葉はほとんどなく、担任としては悩んだ末に職員間にも相談を持ち掛け、その結果として、保護者に声をかけていくこととした。

改めて話し合いの場を設定することは、この段階では保護者の受け止めが重くなりすぎの可能性が考えられたため、降園時、担任から最近の様子を伝えながら、家庭での状況も聞き出していくことから話し合う。

これまでも多少は園での状況を伝えていたため、思いが出せない状況が続いていることについては、母親も気にし、悩む部分もあるようだった。家庭での状況では、母親自身は特に気になることはない様子であったが、これまでのB子との関わりの様子や母親自身の言動を見ていると、何事に対してもきちんと丁寧にされているものの、柔軟性は少ないように感じられた。

B子自身からも「きちんとしなくては」という意識を感じることもあり、そうした緊張感が思いの出しにくさに影響している面もあるのではと思われたため、B子への関わり方に少し緩やかさをもつことを母親に提案してみた。しかし、母親からすれば自分の子育てを見直すように言われたという受け止めになり、納得しがたかったようで、母親友達に相談するなど気持ちが混乱している様子が見られた。

そこで、次のような手立てを実施していった。

まずは、担任以外の保育者からも、降園時などにちょっとした機会をとらえてさりげなく自分の見たB子の様子とともに、心配していることも伝えた。また、園長が送迎時に声をか

け、母親の気持ちの受け止め、寄り添いに努めた。そのうえで、気軽に子育てについて相談できる専門機関を紹介していった。

専門機関での相談後、母親から担任に「先生と同じことを言われた。B子への関わり方を、考えてみます」と伝えてきた。その後、B子には少しずつ安定した様子がかがわれ、以前よりは自分の思いも出すようになってきた。

〔事例からのポイント〕

- ① 保育者は専門職ではあるが、臨床心理学等の専門家ではないことから、保護者によっては専門機関でのアドバイスに重きを置く場合もある。今回は専門機関を保護者に紹介すると同時に、園と専門機関とで連携し、B子や母親の状況等について情報共有したり、関わり方について意見交換したりした。この取組みにより、園から伝えたことに母親が納得し、B子への関わり方の見直しにつながった部分も大きいと思われる。
- ② 担任だけでなく、全教職員が問題を共通理解し、母親に対してもそれぞれの立場で出来る関わりに努めたことで、様々な視点でのB子の捉えや各保育者の考えを伝えることになり、「園対母親」という構図になることなく関係性を保つことができた。相談を行う関係は、対立ではなく共にある関係であることを、確認する機会にもなっている。
- ③ その子自身のもつ課題もあるが、家庭での関わりも幾分かは影響していることが多いため、園で解決できることと、家庭にも協力を依頼していくことを見極め、保護者に働きかけていくことが大切である。

### 3.2.2 母親同士の関わりが問題となる場合

【事例3】 4歳児C男の母親より、D男の母親との関係を説明したいとの要望（4月）

1学年1学級の園であったことから、3歳児後半からC男とD男の母親同士の関係が悪化した状態が、4歳児になっても継続していた。担任が替わったこともあり、これまでの経緯を知っておいてほしいということで、相談室にて日時を設定して園長・主任・担任の3人が同席し面談を実施する。

C男の母親の説明は次のような内容であった。

「3歳での入園当初より、子ども同士がよく遊ぶことで、母親同士も仲良くなり、他の子どもたち数名も含め家庭間で行き来していたが、その中でD男の母親がC男に対してのみ注意や文句が多いと感じるようになった。それを直接D男の母親に言ったことで険悪な関係になる。第三者も交えて話し合う機会を園から提供されたが、気持ちは平行線のままだった。」「4歳になって、母親同士は交流しないままだが、周りの母親がD男の母親に同調することが多く、漏れ聞こえる話の内容に傷ついている。自分を支えてくれる母親友達もいるが、しんどい気持ちを抱えていることは先生方にも知っておいてほしい。」「夫は自分の思いを汲んで心配している。自分としては、C男の友だち関係も心配である。」

これに対し、「お母さんはこう思ったんですね」「お父さんはこう思っているんですね」「しんどい思いを抱えていたんですね」と、思いの受け止めと確認・理解を繰り返していくことで、母親はその都度「そうなんです」と答えながら、最後は「話してよかった」と

言われ、少し気が楽になった様子がかがわれた。この時は母親の話を聞くことに終始し、このことにも留意しながらC男に関わっていくことを伝え、終了した。

この後もD男の母親との関係は改善されることがなかったが、園に対しては信頼を寄せ、担任や園長に対し自分の方から気軽に話しかけることは続いた。

〔事例からのポイント〕

- ① 保護者同士の関係は、各自の主観的な捉えも含まれているため、園としてはどちらかに同調することはできない。このため、「それはひどいですね」など、相手を否定する言葉を返すと、「先生は自分の味方をしている」という認識を与えてしまうので、言葉については、細心の注意を払うことが必要である。
- ② 「あなたはこう思ったんですね」と、相手の言葉を繰り返したり整理したりしながら、確認・理解することは、共感・同調でなくても自分をわかってくれていると感じることにつながり、その後の関係を良好なものにすることができる。そのことが、問題が起きた時の円滑な解決に資するところは大きい。
- ③ 今回は、園側がどのような対応をとったかを確実に残していくため複数で面談している。教職員間での共通理解が図りやすいことと、記録を担当する係がいることでどのように伝えたかを詳しく書面で残せることが利点である。これは、園としての関わりがどうであったかを振り返り、より望ましい方向を探っていくときの資料になると同時に、残念ながら問題が大きくなった時の事実確認資料にもなる。

【事例4】 5歳児E男のF男に対する行動について、F男の母親からの相談 (6月)

E男は、知的な理解力に優れ、発想力や論理性も他児から抜きんでている。担任からの遊びの提案に対し、自分なりに考えを巡らせ取り組もうとする行動力もある。このため、E男を中心としながら、F男やG子ら数名がグループで遊ぶ姿がよく見られていた。しかし、E男の考えたことが周りの子どもとやや乖離していることも多く、一緒に遊んでいても自分の考えを強く押し通そうとすることが度々あった。時には、押さえつけるような言動が見られたりもした。

6月になって、降園後にE男がF男に対し押さえつける言動をしているのを何度か見たF男の母親から相談があり、園長と担任が同席して面談を実施した。

面談では、降園時に自分が見たE男とF男の関わりの様子、家庭で問いただした時にF男から聞いたことなどを話され、「E男のことを何とかできないか。それにE男の母親も見ているだろうに、何も言わない」と、母子両方への不満を訴えられた。F男の母親としては、園内でE男に対応して欲しいということの一方で、F男とE男を関わらないようにさせて欲しい気持ちと、E男の母親にもこの状況をもっと認識して欲しい(できれば謝って欲しい)気持ちがあるように感じられた。

担任としては、E男、F男それぞれに良さや課題を感じており、特にE男のクラスでの状況は担任も意識していて、様々な関わりを行っているところであった。そこで、クラスでの子どもたちの関わりの様子と取り組みを伝えながらも、F男のしんどさを考慮して関わり

をさらに見直していくこと、E男とF男が遊んでいる時に楽しそうな表情も見られていることから、関わりをなくすのがベストとは考えていないことを伝え、この件については、園としてもしっかりと意識していくので、もう少し対応の時間をいただきたいと申し出た。また、E男の母親にも話をしていないわけではなく、E男と友達との関わりに悩まれている様子もあることは伝える。

この面談後、F男の母親からE男との関わりについて、担任や園長に話しかけてくることはなかった。F男の母親としては、「まずは先生たちに気持ちを伝えられたし、伝えたことでF男のことも気を付けながら関わってくれるだろう」という安堵の気持ちがあったのかもしれない。また、もしかしたら「先生たちが園で対応するといったことに口出しは賢明でない」という思いも、あったのかもしれない。

その後も、子どもたちの中でE男がもめごとの原因になることは度々あったが、一つ一つ話し合いながら、E男の気持ちも受け止めていったことで、以前よりはE男の言動が穏やかになったようにも見られた。

〔事例からのポイント〕

① 保護者によっては、保育者が思う以上に相談することに気持ちの壁を感じる人がいる。「忙しい先生を煩わすようにならないか」「こんなことを言ったら、モンスターペアレントやクレーマーと思われないだろうか」という思いと、「わが子がつらい思いをしているのに、このままでいいのか」「先生に伝えて何とかしてもらわなくては」という思いがせめぎ合い、勇気を振り絞って声をかけてくることもある。

目の前の保護者がどんな思いで声をかけてきたか、一見しただけではわからないこともあるので、まずはどんなことであれ話を真摯に聞く姿勢、保護者が「相談してよかった」と思えるような受け止めに心がけることが重要である。

② 相談内容によっては、この事例のように「子ども同士の関わりがないようにしてほしい」といった、母親の本質的要求には応えられない場合もある。その際、園として子どもたちの「今」だけでなく「今後」も見据えながら一人一人に育てたい力を考え、トラブルも育ちの機会としながら関わっていることを明確に伝えることは重要である。そして、園や学級経営の方針を理解してもらうこと、園における子どもたちの関わりを担任にゆだねってもらうよう働きかけることで、保護者は安心して子どもを託してくれるようになる。

これは、保育者の専門性を発揮する場であるともいえる。

③ 保護者からの要望が強い場合、担任一人では受け止めきれず、保護者の意向に流されそうになることもある。このような状況下では、保育者は自分の思いと違う方向に向かうことに、大きな不安やしんどさを感じる。

保護者の気持ちを受け止めるにしても、出来ること、出来ないことを保育者自身がはっきりと認識し伝えていくことが必要である。そのためには、教職員集団として相談事案に取り組むことが望ましい。この場合の対応としては、保育者間で話し合い対応を考えることと、面談時に複数対応することの両方を含むものである。



### 3.2.3 発達に課題を感じる場合

【事例5】 3歳時入園当初から多動・衝動性が見られるH男の母親への3年間の働きかけ  
入園前の周知会で初めて来園した時から、多動傾向が見られるH男については、個別の配慮が必要なことや、専門機関との連携を図っていくことを、教職員間では確認していた。母親に対する働きかけ(面談を含む)としては、修了時期まで、次のように展開していった。

#### 〔3歳児〕

多動であることは分かっているが、保育者のように気になる姿とは考えていない母親に、心理的負担にならないように留意しながら、降園時の伝達を利用して、日々の状況を伝えていく。「困った姿」というよりは、「こんなことに興味があって、みんなと一緒に保育室にいるのはちょっと難しいので、職員室でこんなことをして過ごしている」といった事実を伝えることに努めた。それに対し、母親からは毎回「そうですか」という反応のみで、母親の考えを聞き出した時にも「まだ小さいので、こうなのかと思う」と言われた。

3歳児の段階では、家庭環境や生活経験の差も発達に影響している場合があり、園としても、今後の成長をもう少し見守りながら、具体的な姿を保護者に伝えていくこととした。

#### 〔4歳児〕

学級の子どもたちの成長に伴い、少しずつH男との間に、理解力や行動内容の差が見られるようになってくる。また、H男の具体的な姿を母親に日々伝えていく中で、母親が気にする様子も見られだした。そこで、地域の保健師にも相談し、市の相談事業に繋ぐことを確認したうえで、10月頃、母親との面談の場を設定し、H男の気になる姿を確認しながら、H男にとってより望ましい関わりを探るためにも、専門機関に相談してみることを勧める。

相談事業を受けた結果、専門機関を受診することが決まり、その後、定期的に養育訓練に通うようになった。

#### 〔5歳児〕

就学前の1年間ということで、小学校との連携に重点を置いていく。保護者には、教育委員会実施の教育相談及び地域の小学校の見学を薦め、夏季休業中に実施することができた。

この段階での面談では、母親自身はH男の状況を理解し、彼にとってより望ましい学校生活を送れるよう特別支援学級への入級も考えているが、父親や祖父母の理解が難しいという悩みが出された。母親の揺れる気持ちも受け止めつつ、父親自身にも小学校と話す機会をもつことや、H男自身にとって無理なく学校生活を送れるようにするために家族で話し合ってみることを提案した。この後も、降園時に話し合いながら母親の気持ちを支えていく中、特別支援学級への入級が決まった。

年度末に向けての面談では、小学校生活への全般的な不安があること、保護者関係も気になっていることなどが出された。実際、保護者の中には多動傾向や友達を急に押すなどの衝動性があるH男を、眉をひそめてみている人もいることから、今後のことも考え、学級の保護者に母親の思いを打ち明ける機会をもつことを提案する。

母親としては、重たい内容を人前で話すという、一歩が踏み出しにくい状況に随分悩まれたが、園として全面的にサポートすることを伝え、2月に実施する学級懇談会の場で話すこ

とした。

結果としては、H男の状況を、母親自身の言葉で思いと共に伝えたことで、周りの母親からは、「これまで悩んできた思いを知ることができた」「これまで受け止められていなかったことを申し訳なく思う」「これからの就学に向けて、子どもたちがよりいい関係を築けるようサポートしていく」などの声があがり、母親の表情はとても明るくなった。担任としても、子どもたちのH男に対する関わりはごく自然になっていて、一緒にいるからこそクラスの育ちがあったことも伝えていった。

この後、H男は地域の小学校に進学し、職員室がお気に入りの場所になるなど、先生方の温かな関わりのもと、学校生活を送ることができた。

〔事例からのポイント〕

① 保育者は、同年齢の子どもたちを日常的に見ていくことから、個々の子どもの発達の課題に気づきやすい。一方保護者は、育てにくさを感じることはあっても、わが子の姿をそのまま受け入れ、当たり前と思っていることが多い。このため、保育者からの働きかけが思いがけないものであり、混乱をきたすこともあるので、伝えるタイミングや伝え方には、細心の注意が必要である。

② よく言われることだが、「困っているのは子ども」という視点に立って、その子どもにふさわしい環境や、より望ましい関わり方を考えていくことが、園生活を楽しいものにし、成長を引き出していくことにもつながる。その子の園生活や学校生活をより望ましくするための専門機関との連携であるという目的が、保護者に十分に伝わるのが大切である。

そのためにも、日頃の姿を客観的事実として伝えながら、まずは、ありのままの子どもを知ることができるようにしていく。

③ 子どもにとっては、できるだけ早い段階から専門的な支援があることが望ましいが、特に小学校就学に向けて、どの時期から働きかけていくかは重要なポイントである。保護者が自分の気持ちに折り合いをつけ、子どもの発達に向き合っていくためには、できれば4歳児の段階までに専門機関につないでおくことが望ましい。

④ 学級の保護者への告知は、親にとってとても勇気がいる。自分の子どもの状況を、周りに伝えることで、どんな反応をされるかがわからないだけに不安を感じるのは当然の姿である。そこを乗り越えていけるようにするためには、まずは子どもたちが支え合える関係ができていること、そして子どもたちの育ちをしっかりと周りにも伝えられる保育者の姿勢が必要である。それとともに、保護者を支え、周りの保護者をつないでいく園からのサポートを、保護者自身が感じられるようにしていく。

### 3.3 教職員間での相談

園内の教職員間での相談は、パターンとして、同じ学級を受け持つ複数担任間、同じ学年を受け持つ担任間といった、受けもつ子どもについての情報が共有される場合、年齢が近い教員といった、気軽に話しやすく価値観も似ている場合、主任や園長等園の要となる立場で、日頃より指導を受けている場合が考えられる。

内容としては、子どもたちの受け止め・理解と関わり方、指導の仕方が主となるが、時として保護者対応や、教職員間での人間関係に関する相談もある。相談者は、話し合うことで自分の対応の方向性を見出し、翌日からの保育に取り組む場合がほとんどだが、相手が新任・若年者の場合は、主任や園長が保育に参加し状況を見たり、保護者対応を共に行う等、より手厚く支援をする場合もある。

また、個人的な相談だけでなく、保育カンファレンスといった形で保育者間での話し合いの場をもったり、定期的に園長との個人面談を実施したりする園もある。

### 3.4 教職員対応の事例

#### 3.4.1 保育者間での意見の食い違いがある場合

【事例6】 5歳児担任(若年保育者)からの、行事の持ち方をめぐっての相談 (10月)

毎年、この時期に地域の方を招待しての交流会を実施しており、その中でも4・5歳児はお化け屋敷ごっこをするのが恒例となっていた。

事前に園内で行事についての打ち合わせを行い、各学級の指導計画にも織り込んでいたが、5歳児の女児グループの間で魔女ごっこが始まり、それが遊びの主流となりだした。このため、担任としてはこれを生かして交流をすることはできないかと考えたが、他の教員からは、園としてお化け屋敷で交流をすることに決めていると、受け入れてもらえなかった。しかし、子どもたちはお化けに気持ちが向いていないので、働きかけても全く興味を示さない。どのように保育を行っていけばよいのか悩んで、園長への相談を行った。

これに対し園長は、まずは、子どもの興味を大事にしながら行事につなげていく考え方は間違いではないことを伝えた。しかしながら、園として計画を立てて取り組んでいる中で、他のクラスもそれぞれに取り組んできていることや、地域にも周知していることから、変更しにくい状況となっていることも知らせた。そして、今の学級の遊びとお化け屋敷ごっこをつないでいく接点は必ずあることを示唆した。「例えば、芋ほりにしても、『芋づるを挿す⇒水やりをして育てる⇒育てた芋を掘ろう』という流れが一般的だが、『虫に興味がある⇒秋の虫をみる⇒虫のいる畑に行ってみよう⇒芋畑で芋を掘ろう』という流れも、子どもの興味・関心のあり方によってはあり得る。」といったことを伝え、今回は、「魔女がお化け屋敷作りを手伝う」というイメージで繋げていくことはできないかと提案した。

担任は、活動への糸口が見えてきたことで、やってみようという気持ちの変化が見られた。この後、魔女も参加したお化け屋敷は子どもたちも満足するものだったらしく、交流会後の担任からも、やり遂げた充実感が感じられた。

〔事例からのポイント〕

① 保育は、指導計画をもとに進めていくが、子どもの興味・関心のあり方は固定的なものではなく、様々に変化することが考えられる。このため、計画が最優先されるのではなく、その時の子どもたちの意識の流れに応じ、柔軟に保育内容を変化させていく場合も当然生じてくる。大事なことは、「この活動を通して経験させたいこと」であり、「活動のかたち」ではないことは伝えていかなければならない。

- ② しかしながら、今回のように園全体の行事で、外部との交流も含んでいると、変更をすることが難しい場合も考えられる。そのような中でも、子どもたちの意識と活動内容の接点を探り、つなげていく可能性を考えることはできる。その時にどんな着目をしていくことが可能か考えてみるためには、適度なアドバイスが助けになる。
- ③ 今回の相談は、園長に対するものであったが、上記①②の視点を保育者間で共通理解しておくことで、最初の段階で話し合った時に互いの学級の状況を伝え合い、調整が図られたかもしれない。このため、保育者間の相談のベースとして、個々の保育観のすり合わせが必要であることが、事例から推察される。

**【事例7】 保育者間の関係について手立てを考え、調整をしていく (1月)**

この学年は、同学年に2クラスあり、それぞれクラス運営をしながらも、月の計画や行事への参加などは保育者間で話し合い、学年として歩調を合わせて取り組むことも少なくない状況があった。

年度の終わりに向かう1月、I保育者の表情がすぐれないことから、「何か悩んでいることがあるのではないか」と声をかけたところ、同学年のJ保育者について相談したいと申し出があった。

内容は、「連絡事項が伝わってこなかったり、一緒にする予定の活動時間がばらばらになったりと、うまく連携できていない。自分から話をしてもそっけない感じで、それ以上踏み込めないものがある。クラス間の交流も週の計画に位置付け、定期的に行っていたが、一緒にいてもかみ合わず、自分に対する言葉がこれまでになくきつように思う」というものであった。

それとなくJ保育者の様子を見ながら、学年としての交流活動について聞いてみると、「自分はこういう思いでやっている」と、きちんと話してくれる。その考え方は理解できるのだが、I保育者とのずれはないか担任間で連携・協調すべきところを突っ込んで聞くと、自分の正当性を主張するように話しぶりが変わる。

しばらく、両方に話を聞いたり関わり方のアドバイスをしていたが、どうにもかみ合わない様子が見られた。その原因として考えられたのが、12月に実施した発表会での取り組みであった。

発表会は、クラスとしてのまとまりができてきている時期であり、支援を要する子どもへの対応も考慮し、クラスごとに取り組むことにしていた。I保育者は、経験が少なく自分のことで精いっぱいになると考え、早めに企画・確認・相談をして取り組もうとしていた。

J保育者は中堅で、自分のクラスのこともしながら他のクラスの相談に乗ったり、園全体として任される仕事もI保育者よりは多かったりした。発表会に向けて、J保育者の発想や取り組みは評価されるものであったが、準備にかかる時間の違いもあって、全体的な仕上がりととしてはI保育者のほうがよくできていた。直接2クラスを優劣付けて評価はしていないが、I保育者のクラスの保護者の担任に対する称賛と、自分のクラスの保護者の反応などから、いら立ちがあったのかもしれないと思われた。

その後も、それぞれ個別に面談をしながら、気持ちを合わせていくためにできることはなにか、話し合っていたがそれぞれに難しい状況があった。そこで、クラス間の交流の持ち方を見直したり、補助に入る保育者の存在がクッションになるように努めたりすることで、年度末までのクラス運営に支障が出ないようにしていった。

〔事例からのポイント〕

- ① 保育者にも、いろいろなタイプがいる。几帳面に自分から片付けをしないと落ち着かないという保育者もいれば、多少散らかっていても「子どもたちが片付けることだから」とあまり頓着しない保育者もいる。また、子どもたちの関わりにおいて、細やかに指示をしサポートしようとする保育者もいれば、ある程度は口出しすることなく見守り、自主性を大事にしようとする保育者もいる。これらは、通常はそれぞれの保育者の持ち味であり、どれもあり得る姿として受け止められるものだが、保育者同士の組み合わせによっては、いわゆる「馬が合わない」状態となり、ともに連携を図っていくことが苦痛となる場合も見られる。このような時、保育者は「(精神的苦痛といっても、) ちょっとしたことから」「自分ができていない(自分に非がある)からかもしれない」とその状態を我慢しがちだが、ちょっとしたことでも継続していくことで大きな精神的負担となる可能性もある。このため、早めに職員間、管理職等に相談し、状況の改善を図っていくことが望ましい。その際は、相手を責めるのではなく、自分にとって何が負担・苦痛となっているかを伝えていくことが重要である。
- ② 保育者として長年勤務していく中で、自分と違うタイプの保育者とクラスを相持ちになったり、同学年で連携したりしていくことは少なくないと考えられる。この時に、自分の価値観だけで相手を見て不満を感じたり評価をしたりすると、おのずと言動に出てくるため、相手も不快さを感じるようになる。そのような状況では良好な関係をつくっていくことは望めない。このことから、相手の良さにも着目したり、出来ることは自分が補ったり、時には「腹を割って」互いの思いを伝え合うこと等、共に保育をする仲間としての関係づくりに努めていくことも大切にしたい。ただ、互いの思いを伝え合う場合、状況によっては第三者が同席するなど設定を考える必要がある。
- ③ よく言われることだが、子どもたちにとってよりよい保育をするためには、保育者が心身ともに元気で、保育を楽しめることが大事である。行事の持ち方や保育内容をどのようにするか、また、保護者との関わりなど、年間を通して深く考えたり悩んだりすることは多くあるが、職員関係が良好であれば、相談したり互いに支え合ったりすることができ、ずいぶん気持ちが楽になる。自身の保育を充実したものとするためにも、支え合い助け合える保育者集団を目指すことを意識してほしいと考える。

### 3.4.2 母親との関わり方について悩む場合

【事例8】 母親との関わり方についての、3歳児担任からの相談 (7月)

プール等の水遊びの時期、子どもの体調については家庭からカードに記入したものを毎日提出してもらうことを園から依頼していた。それでも何人かは記入漏れがあり、担任が連絡をして確認したり、遊びの内容を考えながら参加させたりしていたが、F子の母親は記入

漏れが何回も繰り返されたために、降園時に「忘れずに記入してほしい」と依頼した。しかし、「自分だけに言われた」と気分を害されたようで、翌日から一切挨拶をしなくなったため、そのことを悩んだ担任から相談があった。

担任は、日頃よりクラスの保護者にはこまめに声かけをしている。保護者の記入漏れや提出忘れなども、ある程度のことは連絡をとったり後日の提出を依頼したりと対応してきていた。また、伝え方も、あいまいな伝え方はしないが、言葉は丁寧に柔らかく話している。

こうした状況から、園長として、担任の対応に間違いがあったわけではないので、そこは自信をもつことと、同じ対応でも受け止め方は様々で、この母親にとっては、言われたことが自分を否定されたように感じたり、言われること自体が嫌だったりしたのかもしれないことを伝え、母親の思いがどのようなものであるかを一緒に考えながら話し合った。そのうえで、担任としては、母親の態度がどうであれ、毎日の挨拶を笑顔で続けること、伝達事項は事務的でも構わないので、丁寧に伝えることを確認した。

その後、担任は毎日自分から話しかけることを心がけ続け、「今日も目を合わせてくれません」など、その日の様子を、力を落としながら報告する日が続いた。そのたびに、「担任としてすべきことをやっているね」「よく頑張ってるね。」といった言葉を返しながら、気持ちを支えていった。また、他の教職員にも状況を伝え、できるところで支えあっていくようにした。

年度末、終業式の日降園後、担任がうれしそうな顔をして報告に来た。最後の挨拶をした後、母親がやって来て泣きながら、「先生ごめん、ずっと悪いと思いながら、謝れなかった。先生はちゃんと接してくれたのに」と言われ、思いが通じ合った喜びを味わえて、数か月間の心の重荷が取れたとのことだった。教職員みんなで喜び合いながら、心が折れそうになりながらも、自分のすべきことをし続けた担任に称賛を送った。

#### 〔事例からのポイント〕

① 忘れ物について保護者に注意喚起するのは、保育者として行うべき対応ではあるが、保護者の意識の在り方によっては、受け入れがたい場合もある。日頃の保護者との関わりから予測できる場合は、そのことを踏まえた関わりを考慮するが、関わった結果として問題が生じた場合は、早めに周りの教職員にも相談し、出来る対応をとっていく。基本としては他の保護者と同様に接していくこと。

② 保護者対応がうまくいかないときなど、保育者も心が折れそうになるが「あなたのやっていることでいいと思うよ」「頑張っていること、分かるよ」という肯定的な言葉かけをしながら、教職員集団として気持ちの支えとなれるようにしていくことも大事なポイントである。

③ 「なぜ保護者がこのような反応をするのか」を理解しようと考え、保護者に接していく中で、相手の考え方や思いが見えてきたり、時にはその背景となっているものに気付いたりすることもある。それにより、「こんな思いでこうされていたんだ」と保育者自身が理解・納得することで、相手を受け止めやすくなったりもする。保護者理解に努めようという気持ちも、大事にしていきたいところである。

### 3.4.3 子どもへの関わりを教員間で話し合った場合

【事例9】 5歳児K子への対応を職員間で共有しながら関わっていく (7月)

ある日、「先生、僕の上靴がない」という子どもからの訴えがあり、担任が本人の靴箱とその周辺を探したところ、靴箱のすぐ横に上靴があった。この時は靴箱に入っていない上靴を見つけた誰かが、とりあえずそこに置いたのかもしれないというぐらいの受け止めであったが、その後、他の子どもの上靴もなくなるという事案が数回続いた。毎回、探すと違うクラスの上靴に入っていたり、靴箱の後ろ側などに置いてあったりしたため、誰かがいたずらでしている可能性が考えられた。そこで、担任から教職員間に周知したが、誰も上靴を隠す場を見た者はおらず、挙動不審に感じられる子どもも思い当たらなかった。そこで、今後、注意して様子を見ていくことを確認し合い、子どもたちにも、それとなく「上靴がなくなつて困った人がいる」ことや、モラルについて伝えながら、様子を見ていくこととした。

その後もクラス内で子どもの出席ノートがなくなったり、トイレの便器にトイレスリッパが投げ込まれたりしていることが続いた。出席ノートも、最初は置き忘れたり、他の子どもが間違つて持って行ってしまつたりと様々な可能性を考えた。また、トイレのスリッパについては、明らかないざらとして、クラスで注意をした。その際、物が無くなると、無くした人はとても困つたりつらい気持ちになること、トイレはみんなが使えなくなり困ることなど、子どもたちにわかりやすく、相手の立場になって考えてみることを伝えたが、その後も誰がしたのかわからないまま、同じような行為が続いた。

ある日、降園前に偶然トイレの前を通りかかった他のクラスの担任が、K子がスリッパを便器に入れているところを見つけ、見つかったことでK子の表情がこわばつたことも含め、担任にすぐに伝えた。日頃より、K子は相手の気持ちなどに対し敏感なところがあり、保育者や友達の反応を見て対応を変えるところがあるため、とりあえずは触れずに降園させ、その日の降園後、終礼において教職員間で話し合う。

K子は、物事の理解に優れ、グループのリーダーとして遊びをリードしたり、当番活動を責任をもってやり遂げたりと、どの保育者も「しっかりした子」と捉えていた。友達関係にも大きな変化は見られていなかったことから、いろいろと考えを出し合つていく中、家庭環境の変化が要因ではないかと絞り込まれていった。

K子の母親は、仕事の関係で最近忙しくしている様子が見られていた。これまでは、細やかに子どもに関わっており、現在も、母親としては手をかけている様子が見られるが、もしかすると家庭では子どもに関わる時間が少なくなるなど、K子としては、これまでとの違いを感じているのかもしれないことが推測された。また、今年度妹が入園し、母親が妹を気遣っていることも、K子にとっては母親が自分に目を向けることが少なくなったと感じる出来事かもしれないと思われた。

K子は、しっかりしていると思われがちだが、それはK子なりに頑張ろうとする姿だったのかもしれない。それを認められることで安定していたが、バランスが崩れることで、頑張っているのに、報われないような思いをもつたのかもしれないといった、K子の心情が思わ

れた。

一方、母親は忙しくして、気持ちに余裕がなくなっている様子も見られる。K子の様子を聞くことで、落ち込んだりしても、気持ちを立て直しにくいかもしれず、そうなった時に、K子が余計に心穏やかでなくなるのではないかと考えられたため、今回は母親に伝えるよりも、まずは、しんどいであろうK子の気持ちを受け止めることからしてみようということになった。

翌日、担任がK子一人をさりげなく誰もいない遊戯室に連れて行って、昨日見たトイレスリッパのことは触れず、「K子ちゃん、何かしんどいことがあるのかな？辛いことや嫌なことがあったら、話してね。聞くからね」と伝えた。K子は、ポロっと涙をこぼすが、何も言わない。話はそれだけと伝え、部屋に戻り、あとはいつも通りに接していった。

その翌日からは、何かが無くなったり、いたずらされたりすることが止まった。その後、母親のほうも落ち着き、以前よりゆったりした気分になっているように見受けられた。そのこともあってか、K子の笑顔が自然なものと思えることが増えていった。

〔事例からのポイント〕

① 教職員間での情報共有をしていくことは、多くの園・所で日々行っているが、特に今回のように「誰がしたかわからない」出来事は、より多くの目で見ていくことが必要となる。また、「なぜK子がこのような行動をしたのか」「それに担任としてどう向き合っていくか」を考えていく時、担任の見ていないところでの姿や情報を共有したり、様々な保育者の経験を生かした保育カンファレンスをすることは、子どもへのより望ましい対応につながっていく。

今回の事例では、K子であると特定された後、どのように声掛けしていくかを教職員間で協議し、K子の心情を思いやる声掛けにとどめたことで、K子の気持ちをほぐすことにつながっていったと思われる。

② 子どもたちは、時としてK子の事例にみられるような望ましくない行為をする。何気なくしていることがエスカレートしたものや、単なるいたずらもあれば、気持ちの荒れをそうした行為に転化させていくこともある。このため、子どもが「どのような心持ちでいるのか」「なぜこの行為をしたのか」を正しく見極めることが大変重要である。そのためには、日頃から個々の子どものことをよく見、その心情理解に努めることが大切であるし、登降園時の保護者との関わりから、家庭状況を把握するように努めていくことが望まれる。

K子については、園内の様々な姿を分析する中で、この時期の大きな変化として母親のことが考えられ、そこをポイントとして対応を考えていくことができた。

③ 保育者の言葉は、時として保育者が思う以上に、子どもに大きな影響を及ぼすことがある。この事例でも、最初はトイレにスリッパを投げ入れたことを叱責することも考えた。しかし、行為をとがめる言葉が保育者に対する拒絶になりかねないことをK子の様子から感じ、K子に一番伝わる言葉は何かを考えていった。結果として、「先生は何も言わなくても、自分がしたことを知っている」という思いがブレーキになって、行動をストップさせたとも考えられる。



また、K子は、しながらも決していいことをしているとは思っていないはずで、やめたことで、そのことについてクラスで話すこともなく、「話し合いの場にいたたまれない思いをしながらいなくてもいい」という、ほっとしたものもあったかもしれない。何より、自分がしていることを、悪いことをしたと責めることなく、しんどいのでは、と受け止められたということが、K子の気持ちのあり様を変えていったのではないかと思われた。

#### 【事例 10】 5 歳児 L 子への関わりと、その保護者への対応について

職員間で話し合っていく (6 月)

5 歳児になり 3 か月がたち、子どもたちは自分の主張を互いにしっかりと伝えられるようになってきていた。その中で、L 子は片付けの時間や遊びの場所など、友達の行為がクラスとしての約束に反すると思うと、まずは相手に言うものの、相手が聞き入れようとしないと、担任に訴えてくることが続いた。

担任から注意を受けた子どもは、自分の非は分かっているが「L 子が先生に言いつけた」行為は納得しがたいようで、L 子は友達の中で少し居づらさを感じているように思われた。実際、女兒の中には L 子が話しかけても返事をしなかったり、都合をつけて遊びに受け入れないことがあり、それをまた L 子が保育者に「寄せてくれない」と言うことがあった。担任としては、L 子の訴えに応じ対応するのだが、そのことが周りの子どもの思いとますます乖離するのではないかと思われるものもあったため、内容によっては、自分で頑張ってみるよう伝えることもあった。

この頃の L 子は、クラスでの集まりなど、みんなが集まって座り、担任が話始めようとする直前に頭痛を訴えることが時々見られた。いずれも、登園時に家庭からの連絡は特になく、それまでの遊びの様子も通常と変わりなくしている状態での訴えであるが、職員室で預かり、保健スペースで横になって休息をとらせるようにした。しばらくすると「治った」と自分から起きだして部屋に戻り、降園まで元気に過ごす。保護者にも経緯は伝えるが、翌朝の連絡では、毎回、特に気になることもないとのことだった。

実際、不調を感じての訴えとは思われるが、何度か繰り返されたため、担任から終礼で相談事項として話があった。話し合いでは、前年度や 4 月からの L 子の様子なども話し合われ、結果として「本当に調子が悪いかもしれないが、毎回発熱やその他の症状はなく、病的なものというよりは気分的なものの影響で、しんどさを感じているのではないか」という、担任が感じているものと同様の捉えとなり、そのうえで対応について協議していった。そしてその結果、次のように方針を定めた。

L 子が少し休むことで、自分で気持ちを切り替えられるのか、実際体調が良くなるのかははっきりしないが、その後の調子が良いのであれば、まずは有効な方法と考え、不調の申し出を受け入れることとする。また、友達のことで「〇〇してくれない」「〇〇と言われた」など、L 子にとってマイナスな思いで伝えてきたときには、その事実はきちんと受け止めていく。そのうえで、まずは自分で相手に対応してみる方法を伝える。L 子を遊びに入れないなど、内容によっては子どもたちと話し合う場を担任が意図的に設けることで、相手が自分

たちの論理で巧妙にL子を遊びから外そうとする行為は防ぐようにする。それと共に、L子が安定して関わられるような友達との関係をつくっていく。

保護者に対しては、体調が悪く休んだことは必ず伝え、家庭での様子に留意してもらおうと共に、L子が友達関係や園での出来事について家庭でどのように自分の思いを伝えているのか、さりげなく聞き取りをしながらL子の心情把握に努める。その際、保護者がちょっとしたことも過敏に反応しがちであることから、気になる姿を伝えるにあたっては、どうしても伝える必要があるか、内容や伝え方の見極めをしていく。

このような方針のもと、まずは保育者の対応により、子どもたちの関わりと、本人の様子を見ていくこととした。

その後、遊びのメンバーの増減が緩やかにできるようなお店やさんごっこにL子と周りの女兒を誘い、担任も関わりながら一緒に遊びを楽しむ経験ができるようにしたり、プールでの水遊びをクラス全体で楽しんだりしていった。その中で、L子が気の合う友達と楽しそうに遊ぶことが増え、頭痛を訴えることは少なくなった。しかし、周りの子どものことで担任に訴えてくることはあり、微妙な雰囲気になることも見られている。

〔事例からのポイント〕

① 子どもの健康管理は保育の基本である。このため、朝の視診やクラスでの集まり時に体調確認することは保育者としての必須事項である。子どもたちは、多少熱があっても元気に遊んでいることが多く、不調の訴えがあった時には高熱になっていたり、嘔吐直前だったりすることもよくある。筆者も、昼食時にいつもと食事の進み具合が違う子どもを検温し、発熱に気付くことが何度もあった。このため、不調の訴えはまずは病気対応として安静状態を保ち、検温や全身状態の視診・触診に努めると共に、家庭との連絡を取っていくことが大事である。

時として、L子のように気持ちの影響が体調に及んでいると思われる場合もあるが、保健スペース等で個別の対応をされることが子どもの精神的な安定につながることもあるため、まずは病気対応と同様の関わりを丁寧にしていくことが望ましい。

② 自分が気になったことをすべて保育者に伝え、何とかしてほしいと思う子どもは少ない。それが不安からの行動である場合は、対応することで安定につなげていく必要がある。

しかし、L子の場合、自分に正当性があるとの思いで友達に関わるものうまくいかないと思われ、保育者に言ってくるため、周りの子どもたちの思いとはかみ合わない結果となるが多かった。この段階でL子に対し、正当と思うことのずれが両者の間にあることを伝えても、受け入れるのは難しいと考え、まずはL子が一緒に楽しく遊べる仲間関係をはぐくみ、その上で、遊びの中で互いの思いを受け入れあう経験をさせることを重視していった。

一見遠回りなようでも、子ども自身が理解し、納得できる手立てを考えていくことが大事である。

③ 子どもの心の安定を図っていくうえで、保護者との連携は必須である。ただし、保護者にも様々なタイプの方がおり、保育者がちょっとしたことと思って伝えた内容に過敏な反

応を示すこともあるため、伝え方、伝える内容、伝える時期などを十分に考慮していく必要がある。また、伝えた後の反応によっては、保護者へのケアをしていく場合もある。

#### 4 まとめ

学生が、現場に出た時の不安事項の一つとして挙げているのが保護者対応である。昨今、報道やインターネットサイトでも様々な事案を見聞きするため、自分にできるだろうかという不安がどうしても生じていると思われる。その一方で、授業を通して「取り組むべき重要課題」としての認識は高まっている。

冒頭にも述べたが、教育相談は、よく似た事案であっても、それぞれの状況によって細かな部分での対応は異なってくる。このため、まずは教育相談として押さえることが望ましい基本的内容を理解し、そのうえで様々な事例からの学びを生かしながら取り組んでほしいと思う。

その基本的内容として、次の2点に留意してほしいと考える。

一つは、保護者も教職員も、一人の人間として受け止めることである。親である、担任である、中堅教員であるといった、立場による責務から考えていく一方で、その人の置かれている状況や思いに心を寄せていくことを、相談を円滑に進めていくためにも、是非とも意識してほしいと思う。

二つ目は、一人で抱え込まないことである。相談を受ける立場の者にも、心理的負担はある。相談を受けることによって気持ちがつぶれることがないよう、自分で抱えきれないと思ったら、早めに教職員間で相談をしていくことが大切である。

保育者の最大の務めは、子どもたちの健やかな心身の成長を支えていくことである。そのために、日々子どもたちの姿を丁寧に捉えようとする意識をもち、常によりよい保育をめざしていくことが、保護者・教職員間の信頼関係につながり、教育相談の場面にも生きてくると思われる。そのことを常に考えながら、保育者としての向上をめざし、各教科の学びにも取り組むことが望まれる。